

## ◆優秀賞◆

### 戦後たつた八十年。

旭陵中学校三年

櫻井一花

戦後八十年。これは、第二次世界大戦が終わってから経過した時を表している。それは同時に、それ以後、日本が戦争をしていないということを意味している言葉もある。

私のひいおじいちゃんは十八歳で戦争に行つた。私が幼い頃に亡くなつたので、直接戦争の話を聞いたことはない。写真で見る十八歳のおじいちゃんは、軍服を着てこちらを睨んでいる。表情は怖いけれど、顔つきはまだほんの子ども、という感じで、遺影の笑つてゐる「おじいちゃん」からは想像ができないほど若い。まるでクラスの男子がそのまま白黒写真になつたみたいだ。八十年前、私たちと同年代の子どもたちが実際に戦争を行つていたのだ。その写真は、他のどんなものよりもリアルに私にそのことを実感させた。

生まれて十五年。私は生きていることの素晴らしさを知つた。友達と他愛のない話で笑い転げている時間、美しい音楽で心が弾む時、弟のかわいい寝顔、雨上がりにキラキラ光る木々。誰かを好きになることがあつたら、今まで経験したことのない気持ちにも出会えるかもしれない。私には未来がある。八十年前の「私たち」も同じだったはずなのに。

私が初めて戦争に触れたのは、「はだしのゲン」という漫画だつたと思う。原爆投下後、ゲンは、家屋に押しつぶされて身動きが取れない家族を助け

ることができなかつた。生きながら火に焼かれる弟に、欲しがつていた軍艦のおもちゃを渡すのだ。読んだ後、しばらく怖くて眠れなかつた。きっとこのようなことは当時の日本では数えきれないほどあつたことだろう。そのような経験をした人達が、苦しみに耐え、悲しみを抱えながら今の日本を作つてくれた八十年だつたのだ。

戦争経験者の高齢化が進み、年々その数が減つていきつつある中、私たちは戦争を教科書の中でしか知ることができない。直接話を聞くことができるのはもう限られている。今も世界では、ロシアとウクライナ、イランとイスラエルなどで戦争が起きている。はだしのゲンも思想的な問題から、広島の平和の教材から削除されているそうだ。

戦後たつた八十年。人は何故、忘れてしまうのだろう。何故、同じ過ちを繰り返してしまうのだろう。私たちは、戦争の悲惨さに目を背けず、正面から向かい合つていかなければいけない。臭いものに蓋をして誤魔化していくは、同じことの繰り返しになつてしまふ。見たくないものの中にこそ真実があるはずだ。

人間は言葉を持っている。核兵器をカードに脅しあうのではなく、対話をするべきだと思う。同じ地球上に生まれた仲間なのだから、血を流さずに解決できる道を探すことはできるはずだ。今を絶対に戦前にしたくない。

戦後八十年。そんなことを考えた夏だ。